

第二章 文法學の概念とその方法

一

我々が日常行つてゐる言ふといふこと、即ち言語行動は、言語の最も具體的にして直接的な事實である。それは此の行動的世界歴史的現實の形成要素として、言語の眞實在とも稱すべきものである。言語行動は我と汝との心的行動の一つであるが、かゝる心と心との交渉に於て常に物的な媒介作用が働かなければならぬ。言語行動が成立するには言語的物象活動が介入するといふことがなければならぬ。language などといふのは一般にかやうなものである。言語行動と稱する特殊な心的行動を成立せしめる物的媒介作用が language である。我が國古代の言靈の概念が之である。かゝる言語的活動には靜的な側面と動的な側面とがある。その靜的側面に於て成立するものとして language があり、動的側面に於て成立するものとして個々の parole がある。langue といふのは歴史的社會的所産として成立し、然も言衆各個の腦中に潜在待機する記號體系面であり、parole といふのは個人的創意によつて成立し、然も社會的歴史的に顯現廣布する記號的行使實演面である。後者は謂は

ば、ことであり其の言のはが前者であると言ふことが出来る。かやうな言の葉と言との統一活動が即ち言靈の働であり、かゝる言靈の媒介作用によつて言ふことが此の歴史的現實の形成要素として成立するのである。言の葉はそれぞれ、能記としての音映像と所記としての概念映像との聯合物である。二面相的物質である。随つて言連鎖も常に能記的規制による外的な發音操作と所記的規則による内的な言表操作とがそれ／＼別の方向に發展する。立言の眞義は文を構成することにある。記號を放出して文を生産することである。かやうなことが思想が單純で立言が常に單一記號的であれば、語と文とが相即的であるから別に問題がないが、稍複雑なものを表出しなければならぬやうになると、語と文との相即關係が緩び、その間へ記號間の結合關係といふことが介入するやうになる。さうして語と文との中間物として句といふものが成立して来る。句は語の二單位的結體であるが、かやうな結合連續の方式は多種多樣であり、又一方之に對して文の成立因として非結合的な斷止終結の方式が生じ、此處に於て言語體系面に新たな制約事實が加はるのである。文法の事實といふものは一般にかやうなものであるが、斯くして言語事實には質料的な語彙と形柁的な文法とが區別せられる。文法学といふのはかゝる形相的な文法事實を直接對象とする學的勞作である。併しかゝる文法の諸事實は單に雜多なものとして群居するものではない。之を統一するものは先づ形態である。形態は種々の文法能力を所記として表示する能記的事物である。併し形態は必ずしも最高次の文法

物ではない。形態は文法未顯の語に加へられることにより種々の分節を成すのであるが、かやうなことを支配するものとして機能範疇があるのである。故に文法事實の最高の統一者は機能範疇であると言はねばならぬ。文法事實の末梢部位は句の結體文の成立と言つた種々の具體的な斷續相であり、かやうなものは種々の分節の仕立を任とする形態に統一せられ、而してかゝる形態は然るべき言語範疇に蜷集して一種の構造式的形貌を成すのである。文法學といふのは以上のやうな諸事實を組織立て體系づける科學である。

然らばかゝる文法の科學は如何にして遂行せらるべきであるか。文法學の方法如何。私は此の論說に於てかやうな科學としての文法學の方途を見出したいと思ふ。文法學は文法事實の學理的體系化を使命とする。種々の文法事實の原本的なものの間に次第に何等かの聯關を求め、之を脈絡ある一つの合理體系に形成して行くことを任とする。かゝる所與的事實より合理體系に至る手順方法の眞の道を求めたいと思ふ。

之に就き私は先づ科學と稱せられてゐるものは如何なるものであるかといふことから出發しようと思ふ。科學的勞作の本質如何といふ問題から解明してかゝらうと思ふ。勿論かやうな大問題の解決は容易に爲し得るものではないといふことは充分承知してゐる。併し少くとも、私の立場から考へられるだけの事は考へ、一應之を論じて置かなければならぬ。文法學といふ新しい科學的勞作の

一角に今鶴猪を打込まうとする私の此の立場から、勞作に對する何等かの諦觀がなければならぬ筈であるが、かやうな事を先づ率直に表明して置く必要があると思ふ。

科學は合理性と實證性との辯證法的關係に於て成立するものであると謂はれ、更に操作的であるとか技術的であるとか謂はれてゐる。併しかやうなことも、私はこの行動的世界に於て考へられなければならぬのではないかと思ふのである。科學的勞作は歴史的社會的現實としての行動的世界の行動の一種として行はれるものでなからうか。行動といふことは之を端的に言へば、我が汝に對して何事かを行ふことである。動くとか働くとか爲るとかといふことと異なる行ふことである。行動には種々雑多のものがあるが、之を心的行動と物的行動とに大別して考へることが出来る。心的行動といふのは心と心との交通である。我の心と汝の心とが交渉することである。物的行動といふのは物と物との交通である。我の物と汝の物とが交渉することである。而して兩者とも其の行動を成立せしめ、行動的世界を形成するには何等かの媒介がなければならぬ。心的行動にありても物的行動にありても、それぞれ然るべき媒物の媒介作用がなければならぬ。核とか縁とかといふものゝ働が介入しなければならぬ。かゝる媒介作用に於て種々の心的行動なり物的行動なりといふものが成立し、行動的世界が形成せられて行くのである。併し媒物は主體と同質的であつてはならぬ。同質的であれば物理現象を空間の歪曲と考へるやうに、その媒介機能としての性質が消えてしまふ。さ

らばと言つて媒物は主體と全然無關係のものであつても意味を成さぬのである。故に媒物と主體とは所謂矛盾の自己同一的な關係でなければならぬ。兩者は全く相矛盾して居り乍ら相互に即一の關係に立つものでなければならぬ。随つて心的行動の媒介は物的であり、物的行動の媒介は心的でなければならぬ。心的行動は心的主體間の物的媒介による行動であり、賣買交換の如き商行爲とか經濟活動とかいふ物的行動は、物的主體間の心的媒介による行動である。かゝる種々の物的行動を形成素とする此の歴史的行動世界は眞の物心補足の世界と言ふべきである。科學的勞作といふのはかやうな行動的世界の心的行動として成立するものである。科學は單に科學することではない。一種の社會的歴史的行動でなければならぬ。然もモノローグ的なものではなく、一種のダイアローグと考へなければならぬ。私が汝に語るといふ意味がなければならぬ。而してそれが又汝に對へるといふことでなければならぬ。科學史といふのはかやうなところに成立するのである。科學界と雖も對話の世界である。科學的眞理も動くものでなければならぬ。

科學的勞作は心的行動でなければならぬが、心的行動には又種々のものがある。心的行動は嚮にも言つたやうに物的媒介によつて我と汝の心を通することである。かやうな物的媒介を一般に表現と言ひ、心的行動は此の意味から表現的行動であると言つてよい。主體的に言へば心的行動であり媒體的に言へば表現的行動である。此處に於て種々の心的行動はその行動的方向に傾いたものと表

現的方向に傾いたものとに區別することが出来る。行動的方向に傾いた心的行動といふのは、日常の座作進退動作による種々の意志的行動で道徳行爲と稱せられるものがその代表的なものである。

こゝでは總て善のイデヤが支配し主意的世界の立脚するところである。表現的方向に傾いた心的行動は一般にポイエシス的であると考へられるものである。人間がホモ・ファールとして、物の像とか形とかを作ることにより傾いたものである。働く人間の行動であり作爲の人間の行動である。表現といふことは我と汝との心的交通の媒物であるが、之をホモ・ファールの立場から見れば心が物に生きていることである。客觀物の上に主觀作用を見ることがある。かやうなことが又物の像とか形とかといふものが新たに作られることである。見ることが働くことであり、働くことが見ることである。表現作用は所謂行爲的直觀でなければならぬ。かやうな方向に傾いた心的行動としてポイエシス的なものが考へられるのである。併しかやうなものも何處までも行動的であるといふことを失ふものでない。我が汝に對して然々の事を行ふといふ意味を失ふものではない。單なる製作ではなく行動内容としての製作でなければならぬ。科學は心的行動であると言つたが、それは日常的な行爲の如きものと異なり、右の如くポイエシス的に行はれるものと考へなければならぬ。科學者は科學史の一人であるが、又研究室の中で孜孜として實驗を楽しんでゐる人でなければならぬ。

表現的方向に傾いた心的行動には又種々のものが考へられる。表現といふことは物に心を見るこ

と、物が心に即することである。そこに心的側面と物的側面とが考へられる。而して其の心的側面に於て、次第に心的方向に傾いたものが見られ、物的側面に於て次第に物的方向に傾いたものが見られる。前者は藝術的形象といふ如きものを創造するもので、一般に構想 (imagination) と稱することが出来る。構想といふことは勿論單なる主觀作用ではない。と言つて又單に物を寫實することでもない。主觀的なものと客觀的なもの、パトスのものとロゴスのものとの統一でなければならぬ。然もその心的方向に傾いたものでなければならぬ。形象といふものはかくして創造せられた像である。心的なるものが物的なるものを包み、主觀が客觀を浸蕩せるものである。それは感情の群像であり、美のイデヤの支配するところである。かやうな方向へ次第に深まり物的なものを捨象して行けば、遂には枯木寒鴉底の閑寂境に遊び、形なきに見、音なきに聞かんとするに至る。後者の物的方向に傾いたポイエシスは、環境に對する人間の適應として行はれる勞作である。人間は環境から規定せられると共に環境を作つて行く。生産の眞の意義はかくの如きものである。物は種々の要素によつて成立し居るが、かゝる要素の結合を變ずることが生産である。而して斯く物が生産せられるには人間の勞作に依らなければならぬ。併し勞作といふものは單なる主體的活動ではない。單に働くことによつてのみ行はれるものではない。物の有する法則性に従はねばならぬ。勞作の中にはかやうな合理性がなければならぬ。科學といふものはかゝる勞作の合理性に於て成立する

ものである。勞作的方向の合理的極限として生れるものである。合理勞作として、環境に張合ふ主體性が極限的に平められたものである。併し何處までも人間の勞作として考へなければならぬものである。科學性は如何に之を徹底して行つても人間の勞苦を消すことは出來ぬ。

勞作は自然の形成活動 (Formende Tätigkeit) 卽ち我が國古代神話に現れてゐる產靈の如きものの繼續とも考へることが出来るが、單なる本能的活動ではない。勿論本能活動的なものも一種の勞作と考へることも出来ないことはない。動物的世界と雖も勞苦の世界であると謂はれてゐる。併し眞の勞作は技術的でなければならぬ。技術的生產が眞の勞作である。技術といふことは如何なることであるか。技術といふことは單なる人間の主觀的作用ではない。主觀的恣意は勞苦ではなく享樂である。物を作らんとする主體が環境に規定せられるところに技術といふものがあるのである。どこまでも外の物を支配し克服せんとする心が、反對に物的必然性に規定せられるところに技術が生れるのである。此の意味に於て道具の使用とか機械の運用などといふことが技術の主たるものであらうが、かやうなことが如何にして成立するのであるか。技術といふものが成立する爲には作られるものと作るものとの間に先づ絶對の斷絶がなければならぬ。環境と作用的自己とが眞に對立してゐなければならぬ。客觀と主觀とが連續してゐてはならぬ。後者が單に前者に於て在るのが自然の形成活動といふものであり、反對に又前者が單に後者に於て在るのが我々の意識現象である。然るに

技術が眞に成立する爲には、兩者が絶對の矛盾關係に立たねばならぬ。併し只兩者が分離してゐると言ふだけでは技術などの成立するよすがはない。そこには抽象的な自然と人間とが想定せられるだけである。物心の平行が考へられるに過ぎない。技術が成立するには矢張兩者が何等かの意味で相關するといふことがなければならぬ。矛盾的な兩者が即一的であるといふことがなければならぬ。然もそれが物的側面環境的側面に傾いて統一せられるのである。作るものが作られるものに規定せられるといふ意味に於て兩者が統一せられるところに、技術といふものが成立するのである。製作の人間が環境的自然を模倣するといふ意味に於て、兩者が即一的となるところに種々の技術が生れるのである。故に技術には常に何等かの道具形態が伴はなければならぬ。機械は更に之が自動的或は組織的となつたものである。人間の勞作は自然が仕遂げ得ない事を遂行して行くものであるが、それにはアリストテレスも言つてゐるやうに、自然を模倣するといふことがなければならぬ。此處に於て單なる作用的自己であつたものが次第に環境から規定せられて行き、種々の技術が成立するのである。環境を否定し新たに環境を作らんとする作用的自己が、逆に環境から否定せられ新たな作用的自己が生れ行くところに技術が開けて行くのである。科學といふものは先づかやうな技術的なものとして誕生するのである。西洋科學は鍊金術の如きものから發達し、現在も尙その鍊金術性を失はぬものであるとも謂はれてゐる。

科學には種々のものがある。工學醫學の如く應用科學と稱せられるものから力學數學の如く理論科學と稱せられるものに至るまで、種々の段階がある。併し何れにしてもそれらの技術的性格を失ふものではない。否、技術的性格がその科學の特殊性を決定するものである。論理學の如きものにすら技術性があると言ふことが出来るのである。併し又一方技術その儘が科學でないことは勿論である。一體技術にはハイデッゲルなどが言ふ環視(Umsicht)といふこと、物を見るといふことがなければならぬ。アリストテレスは、テクネはロゴスと結合した製作のヘクシスであると言つてゐる。嚮に私は技術は環境と作用的自己が絶対に斷絶しそれが環境的側面に傾いて一となるところに成立すると言つたが、それは作用的自己が環境を對象化し之を見るといふところに技術の成立因があるといふ意味である。單なる自然の形成活動にはかやうなことが隠されてゐるのである。併し勞作が技術的となれば、かゝる對象を立てゝ見るといふことが顯現するのである。働くことに見るといふことが顯はとなるのである。而してテオリヤの語が意味するやうに、理論體系といふものはかかる見るといふことに於て成立して行くのである。併しアリストテレスが言つたやうに、テクネはエビステメと異なり偶然的特殊的である。單なる技術的直觀は主觀的であり一方的である。故に技術が眞に科學に至るためには技術性の直觀的側面、即物的方向を出來得るだけ擴充徹底して行かねばならぬ。技術の見るといふ方向、物的傾向を極限に至るまで押進めなければならぬ。それと同時に

作用的側面心的方向が次第に押平められ稀薄となつて行くのである。その極カントの意識一般の如きものも考へられるのである。科學的精神といふのはかやうなものである。故に科學といふことは、見る方向へ或は物的側面へ技術的主觀を超えて行く一つの技術であると言ふことが出来る。かゝる科學的立場からは個々の技術的なものはそれ〴〵例證的なものに過ぎぬ。科學は技術を母胎とするものであるが、科學にとつては一々の技術はその身柄を保證する支援物に過ぎぬ。科學は個々の技術的操作の直觀面を抽象して仕立て、行くオルガノンであるとも言へよう。併し科學的勞作の眞の意義はかゝるオルガノンを直觀面に持つ社會的歴史的勞作に於て理解しなければならぬのである。

科學といふものは技術的身體の見る目の如き意味のものである。併し科學は技術的直觀の如く主觀的特殊ではなく、客觀的一般的でなければならぬ。エビステメでなければならぬ。單なる直觀的像ではなく理論的體系的でなければならぬ。技術的直觀を例證化し素材化し之を組織立てて行くオルガノンでなければならぬ。併しかやうな科學的體系理論も一面技術的でなければならぬのである。勞作的でなければならぬのである。科學の技術性といふことは二つの點から考へることが出来る。その中普通に謂はれてゐることは、例へば物理學の如きものは物理的操作の記録であるといふやうに、種々の科學的經驗の深い省察から漸次思想化され現今哲學界の重要な問題の一つとなつてゐるものである。併し之に就いては上來已に觸れて來たのであるから、此處で特に問

題とする必要はないのであるが、私が今言はうとしてゐることは、科學が内容的若しくは素材的にかく技術的である以外に、科學體制そのものが歴史的社會的な巨大な技術的勞作の見る目の如き意味のものであるといふことである。技術的直觀が例證として歸納せられ公的體制をとり、そこに科學的體系といふものが成立して行くと同時に、私的身體的な技術的勞作から社會的歴史的な技術的勞作とも言ふべきものに轉じ、科學はかゝる廓大された技術的勞作の直觀的側面といふ意味のものとなる。此處に於て、科學的勞作といふものは専ら物的側面客觀的側面に接近する方向に發達し、その勞作的主觀性は稀薄となり、遂には意識一般の如きものすら想定せられるやうになるのである。併し物自體とか意識一般などといふことは、それこそ眞の極限位に立つもので、現實的には到底達することの出来ないものである。のみならず、かやうな事は實は科學といふものを單に個人的立場から考へ抜いた結果として到達し得た究極點に外ならない。科學を個人的に考へれば結局カントの到達した如きものとならざるを得ないのである。科學の誕生と共に、勞作性は個人の身體にエビステメ的なものとして残るだけで、その實質は社會的歴史的な身體に轉嫁されるのである。それと同時に科學的勞作は社會的歴史的な目といふ意味のものとなり、科學者は國家社會の選ばれた戦士として最前線に立つのである。

科學的勞作の胚種は動物の感官機能の如きものの中に已に存してゐる。併し禿鷲の目は非常に明

敏であるが、只鼠だけを見ると謂はれてゐるやうに、單なる本能的動作の目は深さがあり器用であるが、その機能は極めて限られたものと言はなければならぬ。かやうなものが道具的となり代用可能となると共に、機能範圍が漸次廓大せられて行き、その代りに又その深度を減じ無器用となる。而して道具とか機械とかといふものが外部に造られるやうになると益々この傾向に進んで行く。ここに於て技術の習得練習といふことが必要となり、かくてそれが又教育の重要な一領域を占めるのである。かゝる技術の成立といふことは、勞作が眞に人間的となるといふことを意味する。自然の形成活動といふものを、人間の心が自意識的に分任するといふことになる。併し技術的勞作は未だ本能的殘渣を多分に有してゐるのである。殊に練習によつて、之を深めれば深める程技術はその見る目の意義を失ひ本能的なものに逆行する。練習は學習の生理化である。科學といふものは、かかる技術を介して生れるものである。技術の直觀面に於て横的に廣まつたものが科學的體制である。併し科學といふものは決して單にそれ自體に於て在るものではない。勿論科學にも學的勞作性はあるが、それは痕跡的形式的なもの若しくは副次的偶然的なものに過ぎない。科學の身分地位は社會的歴史的な技術的勞作の直觀面といふ意味のものでなければならぬ。科學は個人所有でなく社會的歴史的機能である。國家社會の勞苦は、科學を眞に持つことにより飛躍的な解決を見るのである。それは、自然の形成活動に於て、神の攝理とも言ふべきものが、本能などを始め自然の形成活動一

切を支配したやうに、科學者は社會的歴史的世界に於ける雜多な技工的活動を支配するものであるからである。併し科學的攝理は未だ極めて無器用たるを免れない。

以上は科學といふものに對する私の考を大略述べたのであるが、然らば文法學といふのは如何なるものであるか。文法學は文法事實の理論體系を構成する科學的勞作であるといふが、それは如何なることであるか。

思ふに文法學が眞に科學となるためには、一般に三つの段階を経て來てゐるのである。その第一は文法事實の個人的主觀的習得である人間がこの世の中に呱呱の聲を擧げるや否や、直ちにこの事が開始せられ、而して生涯を通じて繼續せられるのである。それは社會的環境物として流布する文法の事實を自己の腦中に描き行く作業に外ならぬ。言語活動の見る目として種々の社會的制約事實を受容し、次第に累積し、腦中秘かに何等かの組織體を形成するのである。而して我々の日常的な言語活動は、かゝる自然的な潜在體系に規制せられて絶えず動いてゐるのである。人間は誰でもかかる意味の文法體系を腦中に一本づゝ所有して居て、談話の時でも讀書の時でも其の折毎繰開いては實用に供してゐるのである。併し人間は又かやうな個人的主觀的なもので満足すべくもない。殊に言語教育といふことが次第に有意的企圖となるに従つて、豫め何等かの客觀的な規範を設定し置き、習得者をして之に合致せしむべく誘導しようとするやうになる。此處に於て規範文典といふ

ものが成立するのである。規範文典は個人の腦中に潜在する自然體系に比し著しく客觀的であるが、尙特殊的なものである。所謂學校文典とか教化文典たるに過ぎない。只管文法活動の純正を庶幾する局限的抽象的な體系である。それは法典であり規約的であり命令的でさへある。規範者の技術的主觀が多分に働いてゐる。巨人化されたる個人の體系であるに過ぎない。教育とか教化とかいふことは成熟者が未成熟者に對して行はれるものであるが、成熟者にも種々あつて、その中比較的優秀な體系の保持者の中から規範文典などといふものが編出されるものと考へられ、而してそこには文法事實の最も醇良なものが簡潔に誌されてあるであらうが、それは專制的文典に過ぎない。科學ではなく教書であり、頭腦ではなく熟練工である。兎も角文法事實といふものの全面に眞迫してゐない。主觀的技術性が眞に押平められ、言語活動の最前線に立つものと言ふことが出来ない。こゝに於て、嚮に個人的主觀的習得の自然體系を超えて規範文典が成立したやうに、更に種々の規範文典を超えて文法の科學が成立しなければならぬのである。

科學としての文法學、それは如何なるものでなければならぬか。勿論文法學といふものは單なる思辨であつてはならぬ。文法學は論理學でもなければ哲學でもない。既存の論理的範疇を強ひて當儀めて考へたり、自家の主我的偏見によつて押歪めたりするのであつたら如何に體系的に整つてゐるやうでも、思辨的運びが巧妙を極めてゐても、規範文典的な考へ方を一步も出てゐないものと

言はなければならぬのみならず、悪くするとそれがロジックの遊戲に墮し、規範文典にも劣るものとさへあるのである。ジャック・デュボアはフランス文法の述作中、*Sed quo feror? grammaticum latium scribo non gallicum.* と言つて嘆いたといふことであるが、我が國明治以來の文法書を見ても、嘆聲こそ發しなかつたが、さやうなものが少からずあつたのではないかと思ふ。併し單なる文法事實の羅列類纂であつてもならぬ。如何程事實的に正確であると誇つても、それが單なる蒐集であつたら、決して事實的に忠實なる所以ではなく、矢張一種の主觀的態度といふものに禍されてゐると見なければならぬ。消極的であるか、反動的であるか、低脳であるか、骨董癖であるか、ともかく矢張規範文典以下に墮し易いのである。文法學に於けるかやうな理と事との分離は何に起因するのであるか。それは文法學が未だ規範文典的な考へ方を眞に超越し切つてゐないことによるのであるが、一面又規範文典の有してゐた眞義を正當に繼承してゐないことによると考へなければならぬ。規範文典は實用文法とも稱せられてゐる如く、眞に實踐と結合せるものと言ふことが出来る。理論體系即實踐體系である。個人的主觀的習得の自然體系的なものから、社會的客觀的に編述された規範文典は、その理論體系として著しく缺陷があり幼稚であるが、實踐技術的性格を失つてゐない。横の展開に非議すべき點が多々あらうが、縦の結紐は極めて緊密と言はねばならぬ。一體文法體系などと言ふものは總て言語活動の言語面に成立するものであるが、それは本能的な言語活動の

總體性といふことを失ひ抽象的體系非實踐的體系に陥つてしまつては全く無意義である。單なる觀念的遊戲か蒐集の趣味か、所謂隱居仕事になつてしまふ。然るに規範文典は、その體系理論に技術的主觀が無法に混入し暴力的でさへある憾があるが、言語活動としての總體性を忘れず文典としての身分地位をしかと維持してゐるものと言ふべきである。此の點科學的文法に於て、規範文典を超え文法事實の合理的體系化を企圖し、その餘り單に理の方向へのみ馳せ、或は單に事の方向へのみ走らんとする、行過ぎた不純の文法學的勞作は大いに省みるところがなければならぬ。

總て學は私的なものであつてはならない。社會的歴史的勞作の見る目といふ意味に於て常に公的でなければならぬ。學の純一性はそこに在るのであり、學問の良心といふものもかやうな社會的歴史的なものでなければならぬ。科學的奉公心でなければならぬ。我々の日常的な言語活動の一面にその社會面的なものとして文法の自然的體系が習得的に成立するのであるが、それは個人の腦中に潜在する私的な特殊物に過ぎない。かやうなものを眞に客觀物として社會的歴史的に顯なものとして展開せしめる作業が、文法學の使命である。私的散在を超えて、その彼方に公的體系を成立せしめるのである。併し、かゝる作業の中道に於て規範文典的な介入がなければならなかつた。個人的體系が一度巨人的體系となつて見なければならなかつた。故に規範文典といふものは、私的文法を眞の公的文法に移す轉轍機の如き役割を果すものとも考へることが出来る。ともあれ、かくして

成立せる社會的歷史的體系を見る目の如きものとして總體的なる言語活動が動いてゐるところに、その眞理性があるのである。文法學といふのは、かく社會的歷史的テーマとして言語活動の公的な見る目として成立するものである。随つてそれは常に言語活動現象の眞只中に在つて組織せられなければならぬ。單に架空的な形式論理的なものでなく、又事實の冷やかな集積としてともなく、文法事實に特有なる、形式論理的なものに何物か加つた理論體系として、原本事實を體系事實に昇華せしめたるものとして、謂はゞ理事即一の理として組織立てゝ行かねばならぬ。而してその理も事も眞に社會的歷史的でなければならぬ。私理私事ではなく公理公事でなければならぬ。随つて理事即一の理はその社會の言衆總體を身體とする見る目でなければならぬ。その社會の言語活動のへ高を事例として包む理論體系でなければならぬ。

かやうな意味の科學的文法體系といふものは、或一人の文法學者の手で成遂げ得べき性質のものではない。矢張社會的歷史的な力によつて次第に成立して行くものと考へなければならぬのである。總て如何なる科學に於てもさうであるが、文法學の殿堂も、その土臺から莊嚴の末々に至るまで、或特定個人の手によつて完全に築き得るものではない。それは其の個人が單に無力なのではなく、元來科學といふものはさやうなものなのである。若し自分一個の手で完全に之を築き得たとするならば、それは所謂規範文典的なものに過ぎない。公に奉せんとする個人の文法ではなく、公を私せ

んとする巨人の文法である。社會的歴史的存在すべき文法體系は、その編述も社會的歴史的存在でなければならぬ。既成の體系に不満を感じ、今こゝに或一つの文法體系を組織立てんために、合理と實證との間を幾千度かけめぐることか。それは言ふまでもなく社會的歴史的存在の奉公の惱である。社會

的歴史的行はれる一切の事例に透徹する眞の理、或は公の理を求めんとする學者の勞苦である。かくて成立せる體系を、さて世に出して見れば、必ずや不徹底極まるものであらう。理と事との間が隙間だらけであらう。此處に於て又他の人々が理事即一を目指して新たに出直してみる。併し恐らくそれらも、永劫に繰返される合理と實證との辯證法的うねりの一々の波頭であらう。文法體系は此の世界が歴史の社會的なる限り、永久に未完成的なものと考えなければならぬ。そこに文法學史などといふものがあるのである。文法學史を細かく見れば、學者の傳記とか一體系の成立過程とかといふものがあるであらうが、それらの末々に至るまで社會的歴史的存在である。併し又一々の體系とか學者の業績とかといふものは、只徒に歴史の海に浮動する藻屑の如きものでは勿論ない。究極的なものの要素物として象徴としてそれ／＼應分の絶對價值を分有するものである。動かざるもの理想的なるものの一角として悠久に不滅の光を放つてゐるものでなければならぬ。それはマイステ

ル・エックハルトの言ふ *nunc aeternum* の如き意味のものでなければならぬ。

個々の文法學者の業績といふものは、文法體系といふ社會的歴史的大事業の一角であり、捨石の

如きものでもある。そこに科學奉公の道があり純一なる學者的良心といふものもあるのである。それには先づ、現在日本文法を對象とする學者總てが一つの共同體となつて、互に裨益しつゝ進んで行かなければならぬと思ふ。併し裨益すると言つても、それは單なる妥協であつてはならぬ。却つて相互に戦ひ抜くことでなければならぬ。刀折れ矢竭き眞理の軍門に降ると言つた正義がなければならぬ。學界といふものは實はかやうな生動せる共同社會的なものでなければならぬ。然も之までの學界では、かやうなことが只自然のまゝに放任されてあつたやうであるが、將來は是非何等かの合理手段によつて之を統整し、眞に能率ある活動をして行かねばならぬと思ふ。而してそれが歴史的現在の事實である以上、過去の業績を繼承し更新し、進んでは又將來への指針をも示すところが必要ならぬ。企畫的でなければならぬ。從來は單に動反動的な歴史的自然的成行くまゝに任せ切りであつたが、過去と將來とを此の現實に於て玩味咀嚼することにより、眞に建設的でなければならぬと思ふ。更に又外在的な他の諸科學とも緊密な連絡をとつて進まなければならぬ。それは單に補助科學とか隣接科學などと言つた傍觀的取扱ではなく、現に我々の眼前に網の目の如く錯綜して展開する諸事象そのものの如く、學界の總力が眞の同胞として全一的に進んで行かなければならぬ。私は日本科學に於ける日本文法學として、かやうな姿を今腦裏に描いてゐるのである。

文法學は言語學の重要な一部門であり、言語學は記號學の主要なる一部門である。記號學とは如何なる學部門であるか。一體記號學(sémilogie)といふことはフェルディナン・ド・ソッスールによつて始めて正當な見地から提唱せられたのであるが、未だ何等その具體的體系は示されず今日に至つてゐる。然も當のソッスールですら、それは社會心理學の一部を形成し、隨つて一般心理學の一部を成すであらうと言ひ、記號學の正確な位置を決定するものは心理學であると言つてゐる如く、眞の自律科學と考へてゐるのではない。併し私に言はせれば、記號學は自然科學精神科學等に對立し、殆んど科學の第三次的世界を劃するに足る科學群であるとしたのである。こゝに於て再び科學の全分野に對し一應の檢討を加へて見なければならぬ。特に科學分類といふことに就いて考へて見なければならぬ。

從來科學分類といふことは様々の立場觀點から行はれて來たやうであるが、それらの多くは思辨的に傾き、現實の科學的勞作分布と合致しない嫌があつた。こゝで私は科學の分類論に就き一々兎や角言はうとする積りはないが、只科學の分類といふことも、科學の即物的性格といふことに基準を求め、物的對象の性質如何によつて爲されなければならぬと思ふ。科學性の自律的分裂そのまゝ、

が科學分類の眞の道でなければならぬと思ふ。科學的勞作といふものは己を空しくして物の眞實に従ふことでなければならぬ。己を空しくするといふことは勿論、只何もしないこと妥協することではない。安易樂居ではない。科學者は最も勤勉な勞働者でなければならぬ。己を空しくすることは己を盡すこと眞に主觀が死することである。そこに深い惱があり勞苦があるのである。かくて磨かれた鏡の如く純一となつた己が物の中に生きることが科學性である。随つてかゝる科學性が又物の性格によつて自律的に分裂する。科學分類といふものはかやうなところに求めて行かなければならぬのではなからうか。

此處で物といふのは形而的なものを一般にかく總稱するのである。對象化し得るものといふ意味である。かやうな物を大別して單なる物そのもの、即ち普通に物質とか物象とかと稱せられる如きものと、心の表現となつてゐる物、即ち表現物とか客觀的精神などといふ如きものとに區別するものが出来る。而して科學には先づかゝる物質を對象とするものと、表現物を對象とするものがある。物質とは如何なるものであるか。物質は一般に要素の結合體であると考へることが出来る。物質は之を如何に巨視的に見ても如何に微視的に見ても、要素の結合といふ點に於て一般である。製作といふことはかゝる要素間の關係を變更し、新たに物を創造することである。而して表現といふことはかやうな要素間の變更に於て心的活動を象徴することである。随つて單なる物質的な物に對

して表現物は精神化されたる物である。客觀的となつた精神物である。かやうなものは一般に文化と稱することも出来る。此處に於て物質を對象とする科學領域を物質科學、或は自然科學などと稱し、表現物を對象とする科學領域を精神科學とか文化科學などと稱してよいと思ふ。

物質を見るといふことは如何にして行はれるものであるか。我々は外界の物象を直ちに把握することは出来ない。無媒介的に物に至ることは出来ない。無媒介的な物象關係は機械的自然といふ如きものに過ぎない。否、自然現象と雖も何等かの媒介作用的なものによつて動いてゐるのである。

物理學者はかやうな事の真相を知らんが爲に研究を續けてゐるのである。我々が物質を見るといふことは、心的作用の媒介によつて物に至ることである。身體の外表に分布する様々の感覺器官、或は内に向かつて複雑に發達せる種々の知的機能、更に外に向かつて整備され行く各種の裝置器具機械等かやうなものは總て物を見る爲の心的媒介として成立したものである。物質界といふものは、かゝる心的媒介の作用なくして絶対に交渉することの出来ない世界である。かゝる知的諸機能を以て照破しなければ觸れることの出来ない闇黒界である。かやうに知的諸機能の媒介によつて物質を把握することを、一般に認識 (Erkenntnis) と呼ぶことが出来る。故に物質科學は方法論的に認識科學と稱してもよい。然らば精神科學の方法は如何。精神科學も物を對象とする以上一應認識的過程を通らねばならぬ。種々の外表物を認識するといふことがなければならぬ。併し精神科學の對象

物は單なる物ではなく表現物である。心の表れとしての物である。精神物である。故に精神科學の方法は認識作用を一步超えたものでなければならぬ。認識以上の方法に依らねばならぬ。即ち認識によつて得た物象的なものを媒介作用として、その心的活動内容に至らなければならぬ。物を介して、客觀化されたる精神を把握しなければならぬ。かやうなことを一般に理會 (Verstehen) と言ふのであるが、こゝに於て精神科學は方法論的に理會科學と稱してよいと思ふ。

物質を認識するといふことは如何なることであるか。物質の認識には、技術的勞作の極限に進むといふことがなければならぬ。勞作といふことは物を作る働であり、物を作ることは物の要素間の結合關係を變更することであり、かやうなことが物質の法則性に従ふところに技術といふものが成立するのであるが、認識といふことは、かゝる技術的勞作を即物的方向へ極限的に進めて行つたものである。その極、勞作的主觀性の實質が稀薄となり形式的となり、殆んど意識一般の如きものにまで押平められるのである。併し物の要素變更性といふことは依然として存してゐなければならぬ。どこまで行つても勞作性技術性を失ふものではない。只その主體は個人的主觀から歴史的社會に移つてゐるのである。然らざれば素朴的實在論の如きものに墮し、認識科學などの成立するよすがは無くなつてしまふ。認識はその分析綜合の過程に於て極めて即物的に物質の要素變更を行ひ、かくて然るべき理論體系を構成して行くものでなければならぬ。然るに表現物を理會するといふ

ことは之と全く異なるものである。勿論表現物と雖も其の外表が物的組織であるから、分析綜合の認識的過程を一旦は通らねばならぬのであるが、その間に於て實質的に要素間の關係を變更するといふことは許されない。所謂再構(nachbilden)でなければならぬ。而してかゝる再構によつて直下に對象の精神構造を追體驗(nacherleben)しなければならぬ。その間にも勿論勝手な主觀的メスを容れてはならないのである。即ち表現物の理會は、橫的縦的に緊密な統體として、之を全一的に把握して行かねばならぬのである。

物質科學にも精神科學にもそれ〴〵種々の學部門がある。先づ物質科學の領域を見渡してみよう。普通に物質と稱せられてゐるものの中最も代表的なものは物理的自然であらうと思ふ。物理學が科學の模範的なものと考へられてゐるやうに、物理學の對象物である種々の物理的自然は物質中の物質である。併し此の物理的自然の世界を次第に具體的方向に進めて行くと、先づ生物的世界に到達する。勿論生物生命の現象を、物理學とか化學とかといふもので完膚無きまでに解き了せるものではない。何處まで究めて行つても、そこには生命の自律性が殘存する。併し生理學とか生化學などと言ふ生機的科學が要求せられるやうに、生命現象と雖も物質的に取扱はなければならぬ一面があるのである。即ち生命現象の環境的側面には蔽ふべからざる物質的領域が廣布してゐるのである。のみならず、生物界といふものは生命的物象とも言ふべき特殊な形態に發達した物質體の現象する世

界である。謂はゞ生物的・自然的・世界である。我々はそれ／＼身體的存在物である以上、物質科學の對象とならざるを得ないのである。又心的現象の如きものも個々の身體的框の中に行はれ、何等かの生理過程に依存してゐる以上物質的なものと考へなければならぬ。意識の世界は心的・自然界とも言ふべき一種の物質的現象の世界である。心的活動が物質界を逸脱せんとするには、かゝる個々の身體的框、即ち個體といふものから離れなければならぬ。客觀的精神とか表現物とかといふものに羽化登仙し、眞に社會的・歴史的な世界に出なければならぬ。文化といふものはかやうなものである。故に單なる心的活動といふものは未だ身體的なものに過ぎない。生物的・自然の中に特殊な一郭を劃したものに過ぎない。不徹底なる精神物である。心理學といふものが將來如何程發展をしても、大局から見ればヴント・心理學の祖述の如きものに過ぎないであらう。更に社會學の如きものも例へばデュルケムの社會形態學 (morphologie sociale) のやうな方向に於て物質科學的と考へなければならぬ。社會といふものは單なる觀念的存在物ではない。勿論社會は側人的身體を超えたものであるが、一面展延せられたる一つの人間態である。廣袤を有する一定地域に生活を營む人間の粗密的集團であり、然も何等かの實核的なものを持つ形態である。

翻つて物理的・自然的から抽象的方向に進めば幾何とか解析とかといふやうに種々の數理的世界が開けてゐる。數は物質の抽象的極限である。併し數理の世界は無内容なのではない。主觀的形式とい

ふ如きものではない。數理の世界は群論的な無限の深さを持つ客觀的世界でなければならぬ。それは只、物的對象の内容が等質性となつた場合の體系に外ならない。かやうな數理の世界をも超克するところに論理といふものがあるのである。併し論理といふものも、單に抽象的主觀的な思辨に墮してはならない。論理は實在の説明原理でなければならぬ。眞の論理學は抽象的思惟の學ではなく、具體的思惟の學でなければならぬ。實在が自己自身を説明する道の解明といふ意味のものではない。眞理の學である。實在の具體的極點は歴史的社會であり、抽象的極點は數理的な世界であるとすれば、論理といふものはかゝる全實在界の説明原理でなければならぬ。嚮に、種々の技術的勞作の上に科學の理論體系は、其の見る目として歴史的社會的意義を持つと言つたが、論理は種々の實在科學の思惟原理として之等を抱擁し、之等の見る目の如きものでなければならぬ。論理は單なる形式論理ではなく、内容を全實在科學に委ねたる、實在科學的勞作の見る目として充實し活々したものでなければならぬ。然るに論理がかゝる實在から次第に乖離し、論理學がロゴス的に傾き詭辯抽象を事とし眞理の學たるの實を失ふところに、所謂形式論理學とか傳統的論理學が残る。かやうなことは如何なることを意味するか。私は論理をも超えたところに、記號の世界を考へなければならぬと思ふ。論理學などがロゴス的となり形式論理の如きものに墮するのは、かやうな世界に落込むからであると思ふ。それは何等實在性なき制約物の散在する抽象的世界であらうが

かやうな世界を獨立的に考へることにより、種々の領域に附庸せる宇宙塵の如く考へられてゐた各種の記號物質に安住の地を與へることが出来るのである。而して文法の事實などといふものも種々のものを反映してはゐるものの、結局は此の世界にしかと根張つてゐるのである。文法學が記號的世界を一步出れば直ちに形式論理の誘惑が待設けてゐると考へなければならぬ。論理がロゴス的に墮してはならぬと共に、文法は形式論理に引掛つてはならぬのである。かゝる記號の世界の本質は次に精神科學を一瞥することによつて、今少しく克明に浮出ることであらう。

精神科學の對象である精神物とは如何なるものであるか。精神の眞の姿といふものは、それ自體としては絶對に接することの出来ぬものである。恰も淡雪の實體を知らんとして手にとつて見れば掌上に残るものは只一滴の水であつたやうに、觸れんとした瞬間がもう其の美しい姿が消えなくなつた時である。のみならず、精神はそれ自體が裸像として存立し得るものではなく、常に何等か物象的なものを身につけてゐなければならぬ。否、何等かの物的なものとの統一に於てのみ顯となり得べきものである。精神は常に表現さるべきものであつて、それ以外決して自立の方途を有せぬものである。故に表現物とか客觀的精神などと言ふのである。我々の主觀的心理の如きものでも、肉體的框と深いつながりを持つてゐるのである。かやうな表現物としての精神の最も理想的な姿が個性である。個性は表現物を物心一如體としてそのまゝ眺めた精神物本來の姿である。勿論單なる外

表的なものに執らるゝことなく、又強ひて精神の真相を知らんとして何等かの概念的なものに纏めるやうなことをせず、表現的緊張をそのまゝ一度的なものとして眺めたものが個性である。歴史學といふものは、常にかゝる個性に觸れて行かうとする。個性を思惟的立場に於て取扱ふ學的勞作である。この世界を個性的世界として見て行かうとするものである。故に歴史學の體系は眞に行動的世界の圖幅であると言ふことが出来る。フンボルトなどの言ふやうに歴史學は一面に於て藝術的である。かやうな歴史的世界の個性を次第に精神的側面へ抽象的に追詰めて行くと、類型といふものを得る。類型とは如何なるものであるか。類型といふものは、表現物を其の創造せる根元的精神に掘下げて探し求めた精神の概念物である。併し精神それ自體の姿といふことは出来ない。謂はゞ概念の薄衣を纏つた精神的裸像である。理念的表現物である。各種の文化學、例へば道德學とか藝術學とか宗教學などといふものは、表現物をかやうな立場から抽象的に取扱はんとして成立したものである。類型の科學である。精神の平面幾何學である。

類型といふものにも種々の段階がある。併し之等を更に精神的側面へ超えて、眞の個性より極めて一般的なる類型に至るまで、總てを把握し、之等を把握する所以の道として解釋といふものがある。解釋といふことは普通に文獻の理會技術の如きものとされてゐるが、之を廣く考へれば繪畫彫刻行為事象等あらゆる表現物に對する客觀的精神の把握作業としなければならぬ。謂はゞ精神科學

の見る目の如きものである。而してかやうな解釋の原理とか過程とか、更にその可能性妥當性等の一切を論ずるものが解釋學(Hermeneutik)であるが、それは歴史學や文化學等に於て表現物を取扱ふ一般的技術論であつて、精神科學の論理學とも言ふべきものである。解釋は常に物即心の表現的緊張の持續を念としなければならぬ。併しそれは單なる物心の平行的把握といふことではない。解釋はどこまでも精神物の理會に向かはねばならぬ。物即心の心に向かはねばならぬ。内容主義的でなければならぬ。勿論それは主觀的解釋とか獨斷的解釋とか、直覺主義印象主義といふものに陥つてはならぬ。その行先には何もものもないのである。ナンセンスに終つてしまふ。併し、それらは缺陷ある解釋として鍛へらるべきものであらうが、解釋本來の方向を誤れるものと言ふことは出來ない。整へる解釋に對するディオニソスのものである。之に反しその精神物の把握を念とすることを忘却し、只管表現の外表に偏向せんとする形式主義は、精神科學的領域より他の世界へ顛落して行くものと考へなければならぬ。かゝる形式主義的方向の落行く先には如何なる領域があるのであらうか。私はかやうな解釋を超えた領域として、矢張記號物質の世界を考へなければならぬと思ふ。例へば文獻學は文書の解釋を中心として特異的に發達せる一つの科學群であるが、かゝる文獻學の外周に於て種々の記號を取扱ふ勞作が次第に獨立して行き、語源論とか辭書の編纂とか文字學音韻論文法論などといふものが成立するのである。嚮に論理が實在性から乖離しロゴス的となるとこ

に實在界を超えた記號的世界があると言つたが、それは直ちに、此の解釋を超え形式主義に徹底するとところに面接する領域と合致するものである。而して文法學が、この領域を出づることにより、一方形式論理的な魔手に誘惑され易いと共に、又觀念論的に傾き表現的手順を論じ所謂文體論とか修辭論とかといふものの領域を侵すこともあるのである。

以上私は物質科學と精神科學との二界から追詰めて、それらの何れにも所屬することのない獨自の領域が此の兩界に挟まれて存立してゐることを知つた。かやうな科學的領域は從來殆んど顧みられることなく、科學分類等に於ても餘り問題にされなかつたものである。併しそれは、文法的記號を中心とし各種の社會的な制約記號群がそれ／＼の地位を占めて存立し、その外周は無限に廣がる雜多の根源記號を以て埋め盡したる廣大無邊の自律的世界である。記號學といふのは、かゝる特異な科學の第三次的領域に於ける科學的勞作であるが、次にその學的性格に就いて少しく立入つて考へてみよう。

記號を認識する上に於て先づ最初に注意しなければならぬ事は、之を普通の實在物の如く外から直ちに見ることの出来るものと考へてはならないのである。記號は可視的物象ではない。記號實體は觀察的對象ではない。外部知覺的世界を内に逃避せる潜在物である。随つて之を如何に精緻なる物理學的裝置を以てしても、到底その眞實體を捉へることが出来ないのである。それは行使實演に

於ける物質自然の變異を分析するに過ぎない。かやうなものは獨自な記號學的勞作ではなく、物理學の一應用といふものである。又生理學的研究にしも同様である。記號操作の順逆過程を生理的に如何に仔細に觀察實驗しその記録を蒐めてみても、記號の能記にすら達することが出來ぬ。更に腦中樞に解剖學的メスを振るつて見たとしても記號物質の本體を剔抉することは不可能である。心理學の如きものも眞に記號の本質を把握することが出來ないのである。知覺とか記憶とかといふものを幾ら精密に研究しても、記號の外圍を只繞つてゐるに過ぎない。記號物質は心的在態であつても心的現象そのものではない。心的要素といふ如きものとなつてゐるのではない。又社會學の如きものも記號そのものを解決する所以のものではない。特に社會形態學的方向に於て然りである。記號は社會物質であるが、その身柄は個人の腦中深く潜在するものである。それが個人の行使實演によつて始めて社會に開放されるのであるが、かやうなものも早記號ではなく表現物である。併しかかる表現物の束を事例として、個人の腦中に種々の記號が成立して行くとところに、それが個人的占有物である反面に、社會的所產物といふ意味のものとなるのである。今若しかやうなものを社會的表現の如きものとして全一的に見れば、社會學的認識と言ふことが出來よう。併しそれは能記所記聯合なる記號物質それ自體を見てゐるのではなく、記號所產の社會的精神の如きものに接してゐるのである。社會學が眞に記號物質の認識に寄與する所以のものは、心理學と共に記號の正當な在態

を明示する點にあるのである。

要するに物理學とか生理學とか心理學とか社會學などのやうに、實在物を對象として認識しようとする傾向の科學方法に依つてしては、記號の實體を到底捉へることが出来ないのである。觀察實驗を如何に精緻にしても、如何に深めて行つても、依然として記號實體の外郭的な處を繞つてゐるに過ぎない。記號が實在的に活動する其の外周的領域層を、只物理的とか生理的とか心理的とか社會的とかといふやうに眺めてゐるに過ぎない。記號はかやうな實在界を超えた精神的物質である。

第二次的物質である。能記所記の比例的關係をその實體とする、精神的攝理によつて創造せられた物質である。かやうなものは外部知覺的には絶對に見ることの出来ない存在でなければならぬ。併し、勿論之を表現物の如きものと考へてはならぬ。言語の方で言へば音義的に見てはならない。表現物は精神物である。客觀的精神である。記號はかゝる精神物が化石的に凝固して特異な物質となつたものである。精神的習慣が練固めた純乎たる精神的媒物である。只管心の乗具のために作られた物質である。故に記號を象徴的に見てはならぬ。記號の中にも種々の段階があつて、象徴的に見ても差支ないやうなものも實際あるにはあるが、かやうなものによつて記號の象徴性を考へようとすることは、それは單なる殘痕的なものを縁として溯源的に想像を進めて行くに過ぎないのであつて、記號の眞の現實的な實體を把握する所以ではない。記號はどこまでも能記所記の聯合物質とし

て見て行かなければならぬ。而してかゝる記號を單に表現物の墮落せるものと見ず、却つて表現物が長き精神的習慣の力によつて形成せしめられた、精神的結晶物の如く見て行かなければならぬ。隨つて之を象徴的に見ることは却つて記號としての墮落であり、記號を消失に導く所以である。此の意味から記號學を精神科學の方向へ決して導入してはならぬのである。勿論記號の全一體を歴史的社會の表現と見ようとする社會文化學的なものは又別問題である。兎も角記號學は特異な物質認識の科學として、どこまでも獨自な方法を執つて行かねばならない。

記號學に於ける獨自な認識の方法如何。精神科學の理會の方法は、一般に表現物を媒介として躍動せる精神を把握せんとするものである。物的媒介作用を手段として其の目的對象である精神の姿を捉へんとするものである。之に對して物質科學に於ける認識の方法は心的媒介作用を手段として其の目的對象である物質を捉へんとするものである。精神作用的媒介によつて物質の真相を把握せんとするものである。觀察とか實驗とかといふものは皆かやうなことを言ふのであり、それが内的に深まり複雑になつて種々の論理的體系に發展し、又外的には各種の裝置器具機械といふものに發展して行く。然るに記號物質は實在的物質と異なり、かゝる外部知覺的な體系から逃れた精神的物質である。腦中に潜在する物體である。その實體は腦中樞の深窓を一步も出ることが出来ない。然も腦中に潜在すると言つても、細胞の如きものでないから解剖的技術の効もなく、又嚴密に言つて

内部知覺的な心的現象の如きものでもない。更に觀念とか思想などといふものとも異なる。觀念や思想はかゝる記號によつて表現化された精神物で、内的形象とも言ふべきものである。かやうなものを如何にして認識し得べきか。能記所記聯合の比例關係の物質を如何なる手段を以て捉へることが出来るか。私はかやうなものを把握する道は表現物を媒介とするより外にないと思ふ。客觀的精神としての表現物を媒介とすることによつて記號の真相を認識するのである。精神の把握は物的媒介を以てし物質の把握は心的媒介を以てするのであるが、精神的物質としての記號を把握するには表現物的媒介を以てするのである。此處に記號學としての獨自な認識方法があり、之を原理として雜多な記號科學群の方法論が開けるのである。

記號學的方法として表現物を媒介として記號を認識するといふことは如何なることであるか。それは勿論精神科學に於て、表現物そのものを對象とする態度と著しく異なるものでなければならぬ。精神科學にありては、表現物を生動せる精神の姿として取扱つて行くのである。而してかゝる方法の支柱となる論理が解釋であり、解釋法の種々の適用により歴史學とか各種の文化學が成立するのである。然るに記號學にありては表現物を手段とし媒物とするのである。恰も自然科學に於ける種々の感官や器具裝置の如く、又精神科學に於ける表現外徴の如く、記號學では表現物を記號把握の媒介物に供するのである。一體物が媒物となる爲には、一旦その物の性が否定せられるといふ

ことがなければならぬ。物質科學に於ける心的媒介、精神科學に於ける物的媒介等何れも皆かくその主體性が否定せられ無視せられたものに外ならぬ。記號學に於ける表現物も、その表現物としての本來性が否定せられるといふことにより眞に記號認識の媒物たり得るのである。即ち物即心の表現的緊張の持續が斷絶するといふことがなければならぬ。表現物の本來性が如何にして否定せられるか。それは只一個の表現物に對してゐる立場では不可能である。只一個の表現物に於ては、如何にしても一度的な個性の如きものの外に出ることが出来ない。謂はゞ表現物と記號物との未分狀態である。故に少くとも二個以上の表現物を取扱ふといふことがなければならぬ。併しそれも單に同一物の反覆や異質物の並列では意味を成さぬ。そこには類型とか様式の如きものしか表れず、依然として精神物である。眞に表現物が否定せられ、そこから記號物質が抽出せられんがためには、かかる表現物の類似物が次第に重ね合せられるといふことがなければならぬ。かく表現物が様々に交錯累加せられることによつて、そこに表現の極限的なものが見出される譯である。併しかゝる表現物の重加も單に個人的のものであつては、未だ眞の意味の記號を得ることが出来ないのである。謂はゞ内省的なものに過ぎない。眞の記號物に達せんとするには表現物的媒介が社會的でなければならぬ。我のも汝のも彼のも採り用ひねばならない。かくの如くにして種々の記號認識に到達して行くのであるが、その媒物である表現物を事例と稱する。随つて記號學は事例を蒐集し、その事例

的媒介により記號を認識して行くことを唯一の方法とするものと言はなければならぬ。

三

記號學は非實在的物質とも稱すべき記號物質を對象とし、客觀的精神としての表現物を事例的媒介とすることにより、其の認識に到達せんとする獨自な科學領域である。理會と認識とを兩翼とし之が統一をその方法とする科學である。而してその支柱となるべき論理は、論理を超えた論理、解釋を沒したる解釋とも言ふべき社會的制約であり習慣體制である。故に精神科學や物質科學は何處までも内容主義的方向に發展するのであるが、この記號科學は何處までも形式主義的方向に發展するのである。

かやうな記號科學の領域内に包括せらるべき事實には種々ある。即ち全實在界に根を張り記號成立の母胎を成す廣大無邊の根源記號を周邊とし、音符、數學記號、暗號、文字、點字、音標記號等の如き構成的なものから標號、合圖記號、符牒、標識、儀禮等の如き非構成的なものに至る雜多な社會的記號が渦卷いてゐる。それらの中、文法未成の單純記號に對し文法事實を内に成立せしめてゐる言語記號は、記號領域の王座を占むるものと言ふべく、随つてかゝる言語記號を對象とする言語學は、ソッスュールの言の如く、記號學の主要な學部門として記號學的事實の總體の中に顯著な

體系を成立せしめるものである。記號學の主要部門としての言語學とは如何なるものであるか。

之に就き所謂言の言語學 (*linguistique de la parole*) と言語の言語學 (*linguistique de la langue*) 即ちこゝで言ふ記號學的な言語とを先づ明かに區別しなければならぬ。言語學に對して與へられる最も直接的にして具體的な言語的事實は總體としての言語活動である。人間社會に四六時中行はれてゐるところの、各人がその心的内容を相互に傳達せんが爲の言語する活動である。併しかやうな言語活動は、物理的生理的心理的社會的各分野に廣がり行くべき複雑多岐なる混雜物であるから、之をそのまゝ一視面的な科學の對象とすることは出来ない。總體としての言語活動は言語哲學のテーマでなければならぬ。取分け言語活動は個人的即社會的、多即一なる矛盾的自己同一物である。かゝる眞の具體的事物に對しては、哲學を措いてよく其の受容に堪へ得る知性はないのである。廣義の言語學は言語活動の學的勞作として言語哲學をも包含するのであるが、言語哲學に對立する言語科學は、言語活動を各種の角度から眺めて之が體系化を圖らんとするものである。かゝる言語科學の領域内に於て、先づ分かれるものは言の言語學と言語の言語學とである。即ち言語活動は個人的即社會的な具體物であるが、その個人的部面が言であつて社會的部面が言語である。言は言語の個人的行使、特殊な立場と環境と文脈とに於ける實演であり、言語は言主に之が使用を許容したる社會的所產物であり、言の統一物としての一般的法典である。言と言語とは言語活動に於て相

補的であり、自己同一物の兩面である。而して言語活動をかゝる言の視面から體系づけんとするものが言の言語學であり、言語的視面から體系づけんとするものが言語の言語學である。かくて言語の言語學と稱せられるものは、即ち記號學的言語學であり眞の意味での言語學、狹義の言語學であると言はなければならぬ。

言の言語學と言語の言語學の區別につき今少しく立入つて眺めてみよう。言は更に發音とか質料波とか聴取とかといふ如き外側の物質的過程と、要素の選擇や組合せ或は、修辭表情などと言つた內面的精神的過程とに分析することが出来る。而して前者は物質科學的事實であり、後者は精神科學的事實である。前者に於ては、トルベ、コイなどの言ふ音聲意圖 (Tautbielten) を取扱ふ音韻學 (Phonologie) と區別された音聲學 (Phonetik) 或は言語生理學とも言ふべきものと、音聲物理學とか言語音響學などと言ふべきものとの二つの部門が成立する。後者に於ては、形態心理學的言語學乃至は言語表現學とも言ふべきもの、例へばバイイの內的文體論 (stylistique interne) とか、主觀的文體論 (stylistique subjective) とかいふ如き、個人的情意の觀點から採撫せられた事實の體系化、更にかやうなものに對して、外的文體論 (stylistique externe) とか客觀的文體論 (stylistique objective) 或は比較的文體論 (stylistique comparative) などと稱せられるドイツ流の文體論 (Stilistik) の到達すべき言語社會學部門が成立する。以上のやうな言の言語學は言語科學としては寧ろ附帶的である。

物質科學や精神科學の領域内に於ける分岐的科學とも見るべきものである。記號科學としての言語學、眞の意味の言語學に對し周邊的補助的學科に過ぎない。言語科學の本領は何よりも先づ言語の言語學と稱せられるものでなければならぬ。言語記號そのものの認識であり體系づけでなければならぬのである。非實在的物質としての理論體系化でなければならぬ。物質自然の方向精神的の方向何れにしても、實在的事物を取扱はんとするものを以てしては眞の意味に於ける言語學的體系を得ることは出来ない。記號學的言語學、即ち狹義の言語科學といふものは、かく立言の實質的事實の成立する縁となるべき媒物、言語活動の核となる非實質的物質、或は社會的歴史的に生産せられたる精神的物質社會的物質の理論體系を構成するものでなければならぬ。

言語學といふものの本領は大略以上の如きものであるが、文法學はかゝる言語學の最も樞要なる學部門である。已に度々言及したる如く、言語が記號的世界の王座を占め、言語學が記號科學中特異な地位に在りて尨大なる學體系を展開せしめてゐる所以のものは、他の諸記號に於て見ることの出来ない文法の事實がその屬性となつて居り、高度に發達せる記號群であるからである。言語の中心部位は文法事實であり、言語學の中心部門は文法學である。随つて言語に對する關心の焦點は常に文法の事實に置かれなければならず、如何なる言語學的勞作圈に於ても、之を一貫するものは文法の研究でなければならぬ。文法學は言語學の支柱であり骨子である。故に言語學の曙に於て先づ

現れるものは文法に對する自覺であり體系づけであり、而してそこに幾多の消長起伏はあつても、かゝる言語學史的展開の中軸を成すものは文法學的勞作である。例へば、我が國文法體系の胚子とも言ふべきものは漢文訓讀技術の見る目として生れた點法であるが、かやうなものから成長して行つた歌學的文法體系は我が國語學史の心髓となり、然も常に諸他の研究勞作に魁けて體系化の範例となつたものである。又西歐言語學的體系の始祖はホメロスの詞章やヘシオドスの神話の理會を媒介として成立したギリシヤ文法であつて、それが永く西歐の言語學を指導して來たのであつた。然るに此處に偶然なる事實が齎された。それは十九世紀初頭に於けるサンスクリット語の發見である。この事實は餘りにも大きな衝擊であつたため、ギリシヤ、ラテンの古文獻に憂身を窺してゐた西歐言語學をして全く戸惑させ、かてゝ加へて進化論的思想が之に拍車を掛け、言語研究は一齊に或は比較言語學へ或は史的言語學へと驅りたてられて行つたのである。我が國明治以來の言語研究といふものも、この煽りを喰つて學界の主流は常にかやうな方向を庶幾し現在に至つてゐるのである。併し翻つて考へてみるに、言語學史上かゝる大事を惹起せしめたるサンスクリット語の發見も、讚歌吠陀の口誦技術の爲にバーニニ等によつて編まれた梵文典の資であることに注意しなければならぬのである。兎も角かゝる言語學の偏向は文法學をして一時不幸な地位に陥らせてゐたが、併し又狂瀾を既倒に廻らす時期が來たのである。それは先づロマンス語とゲルマン語の研究であり、之を外部

から助成したのは社會學心理學等の新興科學であつた。此處に於て言語學は新たに正道に立直り、再び文法學を中軸として歩武堂々進軍する日が來たのである。

かくの如く文法學は、言語學の中軸となるべき部門であるが、その眞の姿は如何なるものであるか。之に就いて先づ、例へば、ソッスールの通時言語學 (linguistique diachronique) と共時言語學 (linguistique synchronique) の區別の如きものの検討をしなければならぬ。記號は一般に能記と所記との聯合體であることは周知の事實である。即ち物質自然界に面せる表徵概念と精神界に面せる意義概念との聯合物が記號物質である。然も記號物質とは言ひ條、社會的所產物として個人の腦中に座を占め、隱然と力を振るふ精神的非實質的な潜在物質である。顯にこの實在界に流通する自然的物質とは異なる。又精神物表現物とも異なるものでなければならぬ。即ち表現的なものが枯渇し凝固し、化石的形骸的となれる單なる比例關係物である。物と心との表現的必然關係が忘れられ、能記と所記との偶然的關係となれる、表現物の貧困なる影の如きものである。表現を介して精神的宇宙の中に造られ行く第二物質である。記號は一般にかく能記所記の聯合關係物であるが、言語も記號一般としては固より音聲概念と意義概念との聯合物でなければならぬ。文字標號合圖儀禮の如く一定の能記が然るべき所記を伴ふ一種の記號群でなければならぬ。所謂語彙でなければならぬ。言語をかく記號一般として見る立場を語彙的觀點と稱する。而して言語記號は、先づ徹底的に

かゝる語彙的觀點に立つて見らるべきものである。隅の隅まで記號物として見て行かなければならぬ。例へば普通に單語とか語詞とか稱せられてゐるものは勿論のこと、熟語成句の如き上位單位も接辭や文法的語片の如き下位單位も總て音義聯合の記號物でなければならぬ。語彙的觀點は言語認識論の基礎であり根本原則である。併し言語をかく一般記號物として見る立場、語彙的觀點のみを單純に固執してゐる以上、言語に於て認識し得るものは、種々の状態にある記號の分散的な能記所記の偶然關係だけである。ソッスュールの言を以てすれば恣意性 (*arbitraire*) より外認めることが出来ないのである。即ち音義學派の人々が庶幾したやうな、音と義との必然的な關係の如きものは本質的に認定することは不可能なのである。感叫語や擬聲語ですら一種の制約物である。只音義學派の努力は語源論的なものに多少貢獻するところがあるであらう。例へば現行語彙中或ものの全形乃至は一部分が表情音や擬聲音擬態音から發出してゐることは明かに認めることが出來、幸先よければ大部分の語彙がその濫觴を音聲表現の如きものに求め得る日が來るかも知れない。併し語彙的觀點に立つて現行語を見渡し、それらの能記と所記との間に一般的法則の如きものを立てることは絶対に許されないことである。我々は言語をどこまでも語彙的觀點に立つて觀察して行かなければならぬが、そこに支配してゐるものは單なる非配意性 (*innominé*) であることを知らねばならぬ。各種の辭書は常にかやうな立場に於て成立してゐる。辭書には絶対に法則性を介入せしめてはなら

ぬのである。辭書の語彙配列法は徹底的に便宜主義を執らねばならぬ。然らざれば徒らに晦澁に陥らしめ實用に供することは出来ない。併し辭書はかく非配意的でなければならぬが、記號の蒐集とその一つ／＼の能記所記の聯合關係を指示する點に就いてはどこまでも詳細にして且正確なることを期せねばならぬ。辭書の生命は一にそこに懸つてゐるのである。

以上の如く、言語は記號一般として、かく語彙的觀點或は辭書的觀點といふものに立つて之を見る時は、どこまでも非配意性であり分散的であり、そこには相互の間に何の結紐も見出すことが出来ないのである。どの記號もそれぞれ單獨に能記所記の聯合體である。モナド的散在である。隨つて體系もなければ法則もない。只そのまゝである。機械的自然の物質的在態と同然である。そこに辭書の如く、外から勝手次第に之を類別したり順序づけたりすることも許される譯である。併しかかる記號にも變化といふことを認めなければならぬ。それは進化であるか退化であるかは別問題として、兎も角記號物質は單に同一狀態を持續してゐるものではなく、時には或狀態から次の狀態へ急速にか緩漫にか移動するものでなければならぬ。かやうな變化相に於て、數項の記號單位を關係的に結び付けることが出来るのである。かくて先づ、先行記號と後行記號との變異關係の幾つかを認められる。然もかやうな變化現象は他と無關係に單獨の場合もあるが、又或記號の變化が他の數個の記號を伴つて同一歩調で進む場合もあり、更にかゝる變化現象が可成廣範圍の記號群へ影

響を及ぼす場合もある。又變化の波と波とが重なり複合的な變化相を呈し、或は反對に衝突し合つて突如として變化現象を停止することもある。かやうな複雑せる變化現象に於て、變化關係相互の間に種々の類縁性が成立するのである。而してかゝる類縁性が比較的廣範圍に互り持續される場合に變化の法則性といふものが成立するのである。以上のやうに記號の變化といふことが言語をして或種の體系的なものへ導入するのである。言語の變異には三つの場合を考へることが出来る。先づ第一に記號そのものが總體的に變化し行く現象である。即ち記號の能記と所記との比例關係が殆んど平行的に移つて行くのである。かやうな變化相を見る立場に立ち全變化相を解明せんとするのが語源論(étymologie)である。併し語源論の方法は能記所記の平行的移動現象の場合に於てのみ正鵠を得るのであつて、之を逸脱する時は全く牽強附會に陥つてしまふ。一體能記と所記との關係は度々言及したやうに其の間に何等必然的關係はなく取分け兩者は全く相反する世界に面してゐるのである。即ち一は物質界に他は精神界に。故に能記面も所記面も變化する場合には、平行的であるのは寧ろ何等か偶然的な事情によるものであつて、多くは單獨的である。能記は能記、所記は所記、相互に無關係的に變化して行く場合の方が多いのである。そこに語源論の方法の脆弱性がある。之にれよりも寧ろ反對に、能記と所記とのずれ(déplacement)を辿つて行く方法に眞理性がある。之は言ふまでもなく、能記的變異と所記的變異とがあるのである。即ち言語の音相が變質したり剥落

したり交替したりするものと、更に言語の意義が偏向したり磨滅したり反轉したりするものである。前者を音韻論と稱し後者を意義論 (*semantique*) と稱する。併しかやうなものは實は眞の意味での體系と言ふことは出来ぬ。時軸に沿うて縦並び (*Nacheinandersetzung*) する系列系譜であり、記號間の事件である。總體的記號の各部に生起する歴史的形成運動である。眞の記號體系はかゝる時軸性をも捨象せる横並び (*Nebeneinandersetzung*) の状態に於て、尙相互の連帶關係を認め得るものでなければならぬ。一切の外的要因を排除せる眞の自律體系でなければならぬ。ソッスールの主張した通時言語學と雖も、所謂外的言語學 (*linguistique externe*) の一種と見なければならぬ。眞の内的言語學 (*linguistique interne*)、即ち純粹言語學ではない。通時言語學は、次々に置換されて行く繼起的諸辭項を結ぶ關係を研究すると言つても、之を布衍すれば直ちに史的言語學とか地理的言語學とか言ふものになるべき性質のものである。

一切の外的諸條件を排除し、時の要因をすら捨象せる言語が、相互に依屬し自律的體系を成し得る根據は何處にあるか。眞の記號體系は何によつて成立し、且維持せられるのであるか。私は之を言語の文法性に求めなければならぬと思ふ。言語の體系性の根據は文法の事實に求めなければならぬと思ふ。文法事實は言語の斷止連續に外ならない。我が國古來の言を以てすれば、詞の切れつきといふことである。言語は他の諸記號と異なり、單なる語彙ではない。個々別々な記號の偶然的

な集ではない。言語には孤立語などと稱せらるべきものはあり得ないのである。常に何等かの意味に於て他と依存的である。連續的である。併し又單なる連續體でもない。單に連續的なものは單一記號であると言ふのと變りはない。それこそ孤立語であり標識や合圖などと選ぶところがないのである。そこに分節といふことがなければならぬ。切れるといふことがなければならぬ。排他的といふことがなければならぬ。故に言語は常に分析的綜合的全一である。非連續的連續體である。言語とは斷續的記號であると言つても過言ではない。此處に於て言語には、能記に對する所記の聯合的關係以外に、記號相互の相關々係といふものが成立してゐるのである。言語は能記對所記なる比例關係物であるばかりでなく、かゝる記號實體相互の連續斷止の關係構造式でもある。前者を記號一般としての言語の第一屬性とすれば、後者は記號特殊としての言語の第二屬性である。而して前者は物質的實在界並に精神的實在界に立向かふものとして對外的關係であるが、後者は言語自體内に成立せる相互關係として對內的關係である。この意味に於て文法は言語の眞の主觀性であると言つても差支がない。かくて言語は單なる孤立的存在物ではなく、恰も齒車の齒が嚙合つてゐるやうに、種々雑多な關係を以て相互にしかと入組んだ體系物である。語彙的記號が道具ならば體系的言語は機械にも比せらるべきものか。兎も角、一言語は一つの組織體であり體系的纏である。言語の自律的體系性の根據は實はかやうなところにあるのである。言語の眞の主觀性が體系性であること

が、言語に蝟集するあらゆる外在物を排除することにより、その自律的體系性を顯に露出せしめるのである。而して文法學といふものは、かやうな言語の體系性に於て自然發生的に成立し發達して行くのでなければならぬ。文法學は單なる規範とか法則とかといふものであるよりも、先づかゝる言語の心髓から生れ出なければならぬ。

文法學はかく言語の體系性に視點を置く、言語學の一學部門である。雜多な文法事實を次第に統一することによつて、言語の横並び的な組織體、體系性の全貌を把握せんとする純粹言語學である。言語の主觀性に喰入る眞の意味の内的言語學である。ソッスールの言ふ共時言語學は、かゝる純粹言語學としての文法學の概念と略一致するのであるが、併しそれは語彙的事實の多分に混入せるものと言はなければならぬ。緊密なる言語の體系性を故意に語彙的事實を以て弛緩せしめてゐる嫌がある。之は主として彼の心理學癖の禍するところで、彼の學體系は終始一貫その長所も缺點も一に此處から生じてゐるやうである。一體眞理を究めんとする科學は何處までも嚴密でなければならぬ。些の弛みも歪もない理論體系を庶幾せねばならぬ。それには何よりも方法論が嚴密でなければならぬ。方法論の嚴密といふことは、その方法論が對象性そのものから直接に生れ出たものでなければならぬ。自律的方法論でなければならぬ。言語學ならば、言語そのものの事實性から滲み出た方法論を持たねばならぬ。詳しく言へば、言語習得技術の言語面へ極限的に近寄つたところに嚴密

なる方法論があるのである。然るに近來の言語科學と稱するものの多くは、他の自然科學とか精神科學とかの或方法を多少訂正して採用してゐるに過ぎないのである。そこに學體系として幾多の無理があり誤魔化しがある。メイエの如きも、餘りにもデュルケムの社會學に傾倒し過ぎてゐるのではないかと思ふ。ソッスュールの言語學は最も勝れた方法論として學界を風靡してゐるのであるが、矢張社會學とか心理學、殊更心理學に偏向してゐると思ふ。その爲彼の最も得意とする共時言語學なるものすら幾多批判の餘地があると思ふのである。第一、共時的觀點などといふことは一種の譬喩の如きものならば別問題として、嚴密な意味で實踐不能の方法と言はなければならぬ。そこで、實は特定共時論 (idiosynchrone) とでも言ふべきであらうと言ひ、更に言主の聞證を蒐集することであるとも言ふのである。かく進めて行けば方法論は遂に無限の迷宮に入らざるを得ない。のみならず、共時論の上に汎時論 (panchrone) の如きものを置く可能性があると云ふのである。かやうに揉みに揉んだ末、一言語狀態を研究する事は、實際上では輕微な變化を默過する事に歸すると言ひ、さうしてそれが恰も計算の切捨と同様であると言ふのである。共時論に於けるかやうな矛盾性は何處から來るかと言へば、言語の狀態から時の要因を除外した瞬間に、言衆といふものを代置したからである。適確に言へば言主の心的狀態である。そこに心理學に對する甘さがあつたと言はなければならぬ。勿論言語といふものは人を離れて存立し得ない。言語は人間社會の機能である。

併しかやうな考へ方を以てすれば、言語學は常に言語活動とか言語行動などといふものを取扱つて行かねばならぬこととなる。言語學は體系化を念とする科學である以上は、事象を分析抽象して常に一視面的に整序して行かねばならぬ。かくして其の最後に残るものとして、私の言ふ純粹言語學としての文法學の如きものがあるのであらうと思ふ。ソッスュールは一面かやうなものを庶幾し乍ら、他の一面から然らざるものを混入させたまゝで取扱つたところに、解け難い縛があつたものと思ふ。

文法學は言語學の最も純粹なる部分である。それは言語學の數學であると言つてもよい。言語はどこまでも記號一般として能記所記の聯合物であるが、又かやうな聯合物を内に要素として持つ組織體である。外向的要因として比例的關係であるが、内向的要因として群論的關係である。言語は社會的機能としてはどこまでも記號的でなければならぬ。言語行動の媒介物でなければならぬ。然も眞の媒介物、只管なる媒物として成立せる精神的物質、社會的物質でなければならぬ。そこに比例關係物でなければならず、能記對所記と言つた外向的側面は言語の最も重要な第一屬性でなければならぬ。如何に分析綜合的となつても究極的にはかゝる第一屬性の爲のものでなければならぬ。文の爲のものでなければならぬ。言語の第一屬性は文である。併し言語は單にそれだけのものではない。言語は單なる文ではない。さやうな第一屬性を益々發揮せんが爲、第一屬性の働く世界を立

體的に廓大せんが爲のものとして、第一屬性の延展としてそこに第二屬性がなければならぬ。文を内に膨脹せしめる契機として句がなければならぬ、節がなければならぬ。それはふまでもなく、對外的關涉ではなく對内的關涉である。外に當らんとする爲に整へられる内の體制機構である。文法學はかやうなものを對象とする學的勞作でなければならぬ。故に先づ第一に文法學は語彙的羈絆を脱するといふことがなければならぬ。表示的文法學ではなく機能的文法學でなければならぬ。かく語彙的羈絆を離脱するところに、雑多な外在的諸條件を一切排除し純粹なる自律的體系に專念することが出来るのである。故に文法學の方法論的原本原則は、かく語彙的なるものを總て克服し、眞の自律體系に直面することにあるのである。共時的と言つてみたところで、それが眞に言語の事實性から生れたものでない。例へば物を入れる筥の如きものである以上、どこまで入子の如く考を進めて行つても、尙そこに過不足が生じて來るのである。學問の焦慮性はさやうなところに胚胎するのである。兎も角、文法學の眞の方法は、襲ひかゝる語彙的誘引を掃ひ除けて只々縦横に入組む自律體系に直面することに外ならない。そこに内的外的共時通時等の問題の如きも自ら解決せられるのである。